

令和7年度 第2回運営協議会議事録

開催日：2025 年 11 月 6 日 木曜日 14:15～15:40

於：プレゼンテーションルーム

出席者：

【委員（50 音順、敬称略）】岡崎 裕、木村 京子、黒田 浩継、田中 正視、林 洋平（欠席）、山岡 里帆

【事務局員】松井校長、松原事務長、田中教頭、宮武首席、井戸本首席

【学校関係者】各分掌長、学年主任

1 連絡および報告

（1）今年度前半期の生徒の活動について（井戸本首席）

- ・校外学習を4月25日に実施。1年は天王寺（天王寺動物園、あべのハルカスなど）、2年は京都（清水寺など）、3年はユニバーサルスタジオジャパン。
- ・体育祭を6月2日に実施。宅急便リレー、ボールリレー、台風の目、二人三脚、玉入れ、借り物競争に加え教員がリレーに参加。応援合戦は、3年生が海団と山団に分かれ、各団50人程度。
- ・6月13日は関西万博への校外学習を実施。大屋根リングやパビリオンの見学。
- ・7月28日は本校のハートフルはいくコースの生徒が関西万博で発表。こども園の地元食材を使った給食メニューを考案しコモンズ館で発表した。さといもコロケカレーを考案。
- ・9月14日はイオンモール de 文化祭に参加。泉南イオンのセンターコートで大阪健康保育専門学校とコラボレーションして、幼児向けにキャラクターの折り紙やお面作り教室を行った。実施し、約200人が来場。家庭科、美術、書道の作品展示も行った。
- ・9月26日は文化祭を実施。舞台発表はダンスや劇が多かく、3年1組は鬼滅の刃の劇を行い盛り上がった。1年はお化け屋敷や顔はめパネルなどを制作。2年生は食品バザーを行った。
- ・10月31日は国際交流を実施。大阪観光大学の協力のもと2日程のプログラムを実施。観光大学の留学生を本校に招いて異文化交流、高校紹介（食堂や授業体験）を実施。英語で自己紹介、テーマに沿ったディスカッションを実施。11月7日には関西国際空港でチェックインカウンター体験や海外からの観光客へのインタビューを実施予定。

2 協議

（1）「府立高校の魅力化に向けたアンケート調査」の集計結果を踏まえた広報活動について（田中教頭）

- ・「府立高校の魅力化に向けたアンケート調査」から、中学生がどのように高校選択をしているのかを検証。
- ・次年度選抜は公立高校：私立高校の生徒の割合が今までは7：3だったが、6：4になっている。府立高校のシェアは減少傾向。アンケート調査を参考に広報活動・アピールの活性化を図る。

<大阪府立高校生全体の集計結果について>

- ・通学手段は自転車通学が50％程度、通学時間も1時間未満が70％程度。学区制が撤廃されているにもかかわらず、近隣の学校に進学する割合は高い。

- ・進路（高等学校）について考え始めた時期は、中学３年の１、２学期が多い。情報入手手段の割合は、学校説明会やオープンスクール、先輩や知人からが多い。大阪府公立高校進学フェアは影響力が小さい。塾の影響は大きい。大阪府公立高校進学フェアより、各学校のオープンスクールのほうが影響を与えている。
- ・在籍している府立高校の受験を決定した時期は中学３年の３学期が大部分。私学の無償化で選択肢が増えたことにより一層遅くなっているか。
- ・高校選択の理由は、友人、中学の先生、オープンスクール、行きたいコースがあったが多数。クラブ活動で公立を選ばれることはない。また、進学実績が理由にはなっておらず、例えば各高校の進学、就職推薦枠などはあまり周知されていないのが要因では。特徴的な学びがアピールできれば良いのではないか。

<りんくう翔南高等学校の生徒の集計結果について>

- ・ほぼ上記の理由とほぼ同じ。情報入手手段は府立高校生の平均と比べると、保護者・兄弟が多い。受験を決定した時期は中学校３年生３学期で３１％が最も多い。
- ・自転車通学が少なく、電車通学多い。これは、大阪府全体のデータと逆転している。
- ・ハートフルほいくコースがあり、それを理由にしている生徒は３分の１程度。
- ・部活動は進路決定理由になっていない。
- ・就職・進学実績は、学校HPに数年前から掲載しているが、あまり進路決定理由になっていない。
- ・学習内容が自分のレベルにあっているかが大きな選択の理由になっている可能性が高い。
- ・海外の学校との交流ができることが十分に周知されていない。
- ・南海本線沿いにあるので通学が便利であることが理由になっている。
- ・オープンスクールで興味をもった生徒も来てくれているが、自分の学習の習熟度に合わせて本校を選んだ生徒が多い。
- ・周りの高校も制服を改変しているが、今でも本校の制服は人気があるようである。
- ・２３％の生徒が自分の進路に結び付くハートフルほいくコースがあると捉えている。
- ・学校生活全般の満足度が高い生徒が半数を超えている。満足していない生徒は１０％程度。記述欄は、校則が厳しい、中学校を超えていない、先生が嫌いなど。満足度は昨年度と比較して、今年度が高い。昨年度入学生は粗暴な言動をとる生徒の割合が高かったが今年度は従前に戻った。昨年度入学生で粗暴な言動をとる生徒は校のルールを窮屈に捉えていたのがうかがえる。

<広報活動について>

２４０名募集に対して１６０名程度の応募であるため、より効果的な広報活動が必要

- ・本校の広報活動はオープンスクールを年３回実施。外部での進学説明会（校長会、塾など主催）に４回参加。波切ホールで実施の説明会は地理的に多くの中学生が参加する。
- ・泉の森ホール、テクスピア大阪で実施した説明会は主に９地区の高等学校が参加。
- ・特色のある岬高校は中学教員向け（支援担）に７月に実施し、たくさんの参加があった。
- ・本校のオープンスクールは第１回目が１０月だが、他校は８月には実施している。１０月は中学生が考え始める夏休みがから乖離しているか。
- ・本校HPも一新予定してアピールをしていく。

<協議>

- ・（岡崎氏）「府立高校の魅力化に向けたアンケート調査」の意図は何か。
- ・（教頭） 各校の魅力をつくるのが先のような気がするが。私学の無償化に伴い、公立高校も各学校で広報活動をしっかり行うことで魅力を発信するための一助。
- ・（岡崎氏） 公立高校の定員割れは、私学の無償化が最大の要因。施策の結果、定員割れしており、定員割れの原因を各校の広報活動とするのは筋違い。岬高校のニーズが高まっているのは面白い。これはスペシャルニーズ。これに対して他府県からもニーズが有る。多様性への対応（個別最適化）は、次期学習指導要領の内容そのもの。岬高校の多様性への対応は、タイムリーで需要をつかんでいる。りんくう翔南高等学校はそこをもっと強化しては。ハートフルほいくコースへの関心が高まっているならば、そこを見える化していくことが最大の戦略。高校進学は偏差値偏重とはなっていない。生徒のニーズが多様化している。多様なニーズのなかに、このニーズならりんくう翔南高等学校だとなることを核にしていく必要がある。
りんくう翔南ではスペシャルニーズにどのような対応をしているか。
- ・（教頭） 本校では遠隔授業を実施しており、現在2名対象に実施している。2名は、学校生活・友人関係がしんどくなってきた生徒と特性のある生徒。
- ・（岡崎氏） スペシャルニーズに対応できる学校は、一定の層にはアピールになる。ICT技術を使った遠隔授業を行っており、そこまでケアしているのは、ハートフルな学校だからなどをキャッチにしてはどうか。
- ・（田中氏） 本日、午前中は小学校で授業を実施した。自然史博物館のプログラム（地域の化石の勉強）で子どもが面白かった、楽しかったという内容に触れられるのが大切で活動が活性化する。この地域でどう生きていくかを考えさせながら、我慢ばかりではなく楽しい授業を実施したい。普通の授業の中で楽しい授業があれば、子どもたちも多様な関心の持ちかたをしていく。例えば、生物の授業の流れはあるが、その中で味付けを工夫するなど。授業では、漢字の授業などでも、授業を工夫すれば生徒は応えてくれる。泉南市の子は比較的市外に出ていくことが少ない。この地域で所帯をもつ子が多い。賢い子に育ててほしい。博物館のノウハウや幼稚園の先生に来てもらうなどスパイスを教育活動に取り入れて、子どもたちを元気にしてあげたい。
- ・（黒田氏） 勤務している短大が大阪市内から離れており、地理的不利がある。高校生に受験してもらうことが課題。最終の目標は学校が楽しいこと。これが一番と考える。楽しいことを前面に押し出している。りんくう翔南高等学校に来てよかったと思えるよう、生徒に寄り添い、生徒にとって楽しい取り組みを実施し、パンフレットだけではなく、インターネット（LINE や tiktok など）でアピールしていくことが大切。りんくう翔南高等学校に来る生徒の自転車通学の割合が少なくなっているのは懸念事項。生徒が来て良かったなと思えることを大切に。
- ・（木村氏） 中学生は、受験の直前にどこの公立高校に行くか決める。中学3年の1月に進学資料を仕上げるので、2月のオープンスクールは少し遅いか。私学志望者の面談は中学3年の11月から行っている。公立高校に行きたい生徒はまだ多い。行って、見て、聞いて、また、先輩からの楽しいという情報を聞いて進学先を決めていく。

3 情報交換

- ・(山岡氏) 前回の学校運営協議会で、入試改革の一環でポートフォリオを活用した入試についてはどうなったのかという質疑があった。以前、ベネッセではポートフォリオの蓄積ツールを提供していたので調査すると、高校入試でポートフォリオを活用している学校は全国では数校。東京の高校(美術系)が面接時にポートフォリオを持参させて、中学の美術の活動を発表させていた。沖縄の高校(クリエイティブアーツコース)でもポートフォリオを提出し、発表させていた。学校改革については、広島県立安芸府中高等学校の校長の取り組み事例「令和の学校改革を考える」を紹介する。この高校は、地域からのイメージが文武両道で、プラスの評価をされていた。しかし、実態は、教員が課題を多く出すことにより、生徒がいっぱいいっぱいになっていることが分かった。校長が赴任して授業見学し、実態がなぜ評価と違うかと考えたところ、先生の像と生徒の像に違いがあることに気づいた。生徒の声をアンケートで吸い上げることにした。生徒になりたい像を応援する先生がいなかったと感じた。先生めせんの育てたい像ではなく、生徒めせんのなりたい像を策定した。学校生活を自分事とさせ成功してる。